



7月3日のテルアビブの反戦デモ

# ム選法改悪強行採決弾劾

**帝国主義の災禍強めた  
英・ア戦争**

フオーランド(マルビナス)諸島をめぐる英・ア戦争に対して、わが共産党は「国際世論にそむいた英・ア両国」と「平和と人命

## 本号の内容

ロッキード判決と金権政治

進行する「産報化」 // 3頁  
// 教育の荒廃 // と日教組運動の頽廃 // 5頁  
六・一八「連合赤軍事件」判決弾劾 // 6頁  
七・四三里塚集会に一万人 // 8頁

## マルクス・レーニン主義通信

マルビナス諸島をめぐるイギリス・アルゼンチンの戦争、シオニスト・イスラエルのレバノン侵略、イラン・イラク戦争、米帝王導下でのホンジュラス正規軍のエルサルバドル侵略等、全世界で戦争が勃発している。「和平」な時代から激動の時代への突入、戦争と革命の要素の増大、これが今日の帝国主義の時代の特徴である。

帝国主義の時代は、大国、小国とわず軍国主義が不可避である。「いまや軍国主義化は公共生活全体に浸透しつつある。軍国主義化がすべてになりつつある。帝国主義は、世界の分割と再分割のための諸大国の激烈な闘争である。だから、帝国主義は、あらゆる国で中立国においても、小国においても、いつそこの軍国主義化をもたらさざるをえないものである」(『プロレタリア革命の軍事綱領』)。軍国主義化があらゆる国をとらえていることは、帝国主義間の抗争、帝国主義と後進諸国とのあつれきが深まっていることに他ならず、先のサミットにおいてこのことは完全に証明された。

ベルサイユ・サミットは、対ソ経済制裁、通貨、貿易等の重要議題でことごとく帝国主義間の対立が表面化し、「西側諸国の協力」

マルビナス諸島をめぐるイギリス・アルゼンチンの戦争、シオニスト・イスラエルのレバノン侵略、イラン・イラク戦争、米帝王導下でのホンジュラス正規軍のエルサルバドル侵略等、全世界で戦争が勃発している。「和平」な時代から激動の時代への突入、戦争と革命の要素の増大、これが今日の帝国主義の時代の特徴である。

帝国主義の時代は、大国、小国とわず軍国主義が不可避である。「いまや軍国主義化は公共生活全体に浸透しつつある。軍国主義化がすべてになりつつある。帝国主義は、世界の分割と再分割のための諸大国の激烈な闘争である。だから、帝国主義は、あらゆる国で中立国においても、小国においても、いつそこの軍国主義化をもたらさざるをえないものである」(『プロレタリア革命の軍事綱領』)。軍国主義化があらゆる国をとらえていることは、帝国主義間の抗争、帝国主義と後進諸国とのあつれきが深まっていることに他ならず、先のサミットにおいてこのことは完全に証明された。

ベルサイユ・サミットは、対ソ経済制裁、通貨、貿易等の重要議題でことごとく帝国主義間の対立が表面化し、「西側諸国の協力」

# イスラエルのレバノン侵略弾劾 マルクス・レーニン主義通信

## パレスチナ人民に連帯し 帝国主義一掃の闘いを

が空虚と化していることを明らかにした。

尊重」の立場から非難している。こうした非難は、領有権の結着は話し合い、国連の場で等での解決をという点に帰着する。

小ブル平和主義者は、戦争の「非人道性」

音が一層高まっている。米国の強硬姿勢に対して、対ソ強硬派の英サッチャー政権でさえ「米国政府による行為は、英國の貿易利益に損害を与える」と、米方針に反旗をひるがえしているのである。帝国主義間の「協力」、あるいは同盟が、帝国主義間のあつれき、紛争、抗争を排除すると考えうるであろうか?

否である。「資本主義のもとでは、勢力範囲、権益、植民地、その他の分割のための根拠としては、分割に参加する国之力、すなわち、その国の一般経済的、金融的、軍事的その他

の力以外のものは考えられないからである。ところが、分割に参加する国々の力の変化は一様にはおこなわれない。なぜなら、個々の企業、トラスト、産業部門、および国の均等な発展は、資本主義のもとではありえないからである」(『帝国主義論』)。

まさにこうした資本主義の不均等発展に基づいて、帝国主義間の平和的同盟は「戦争と戦争のあいだの『息ぬき』にすぎない」ということ、そして、金融資本と独占は、「自由への熱望ではなく、支配への熱望……あらゆる政治制度のもとでのあらゆる方面への反動、この領域における諸矛盾の極端な尖鋭化」(同)、侵略・民族抑圧の熱望の高まりが不可避となっていること、これらが、今日の戦争の(帝国主義的)性格を規定しているのである。

共産主義者同盟(全国委)  
マルクス・レーニン主義派  
編集発行人 日黒安雄  
横浜港南郵便局私書箱 116号  
振替 横浜9-371169

級への経済的隸属・合理化、賃金抑制の攻撃を強めている。

英國鉄労働者は戦争終結後、政府一独占資本の政治的、経済的圧迫の強化に対し、一九二六年以來の全国ストに突入した。又、C.P.S.A.(国防・原発・核燃料部門労組)は、五月の年次総会で核軍縮運動に団体加盟を決定し(団体加盟は初めて)、反核運動の前進をもたらしている。

他方、アルゼンチンにとっても、この戦争は民族排外主義をあおり、軍政に対する労働者大衆の反抗をおさえつけるための戦争であった。戦争の敗北は、軍政の内部対立をうみだし(国家の最高機関「軍事協議会」内の陸軍と海・空軍との対立)、更に労働者大衆の反軍政・反帝国主義の闘い、そして経済危機の一層の深化をもたらしている。

野党「五党連合」は、六月二三日、即時民政復帰、新政府の内外政策も盛り込んだ「國家再建計画」を発表した。その内容の重点は、政治的自由の回復、憲法秩序の回復と完全実施、戒厳令の解除と政治犯の釈放、外交政策としては反帝・反植民地主義を第一に掲げている。こうした政治的要求が「ペロン主義」の再版であり、歴史的に無力であったことは言うまでもない。軍政は政治的自由の回復を謳い、野党の要求を一部とり込みながら引き続き政権を維持している。ガルチエリ軍政からビニョーネ軍政の移行は、政治的、経済的危機の深まりのなかで労働者大衆の闘いを幻惑せんとする方策以外のなものでもない。六月一五日、ブエノスアイレスでは、数万人の労働者大衆が反軍政・反帝国主義を掲げ闘いに決起した。労働者大衆の革命的闘争の発展こそ、この闘いの前進をもたらすであろう。

## 帝国主義、シオニストへ屈伏したアラブ支配層

六月四日のペイルート爆撃によって開始されたシオニスト・イスラエルのレバノン侵略は、その目的がP.L.O.(パレスチナ解放機構)せん滅とレバノン完全制圧であることが明らかとなっている。日本の労働者階級は、イスラエルのレバノン侵略―パレスチナ人民大量虐殺攻撃を満身の怒りをもって弾劾しなければならない。

今回のイスラエルのレバノン侵略―P.L.O.せん滅攻撃は、われわれが繰り返し暴露してきたように、イスラエルが(米)帝国主義のアラブ支配の橋頭堡であり、イスラエルは「アブラハムの子孫」であるという選民意識に支えられた軍国主義国家であること、このことから不可避に生じたものに他ならない。そして、「その性格は、国内においては差別(それによって国民の六割を占めるセファルディムが貧困と文化的後進性を余儀なくされ排外主義に陥っている)、アラブ人に対する

弾圧、抑圧としてあり、対外的には侵略主義をしてあるのである」(『通信』第六三号)。

イスラエルでは、年間の軍事費が五二億ドルを超えて、インフレは世界最高の水準を持続している。経済危機の深刻化、戦争への動員は、労働者大衆の憤激を高めずにはおかなかつた。現在イスラエルでは侵略に反対する労働者大衆の闘いが組織されている。

他方、アラブ諸国は、イスラエルの侵略に對して全く無力と化している。P.L.O.の要請によつて持たれたアラブ外相会談は、イスラエルへの経済制裁、軍事行動等々に一つ決定したことことができなかつた。そこでアラブ産油国は、帝国主義(メジャーワーク)の石油資源支配に對して、国有化等を通じた反帝国主義のストライキを掲げた。それは、石油資源が帝国主義經濟の重要なエネルギー源であることから一種の政治的、經濟的打撃を帝国主義に与えることが可能であつた。しかし、帝国主義は、國際的なエネルギー機関の創設、石油備蓄、エネルギー源の代替えた反帝国主義の基礎のうえでは、一方における生産力の發展および資本の蓄積と他方における植民地および金融資本の『勢力範囲』の分割とのあいだの不均衡を除去するのに、戦争以外にどのような手段がありうるだろうか?」(『帝国主義論』)。

「資本主義の基礎のうえでは、一方における生産力の發展および資本の蓄積と他方における植民地および金融資本の『勢力範囲』の分割とのあいだの不均衡を除去するのに、戦争以外にどのような手段がありうるだろうか?」(『帝国主義論』)。

こうした歴史的推移のなかで、從来、P.L.O.を支援したアラブ産油国のP.L.O.離れが準備されてきたのである。今回のアラブ外相会談はこのことを公然化させたのである。アラブ支配層・王朝的利害は、P.L.O.がイスラエルの拡張主義の防波堤であり、反帝国主義であることに政治的意義をみいだしていた反帝イラン革命はこの変容を押し進める契機となつたのである。

こうした歴史的推移のなかで、從来、P.L.O.の武装解除を強要している。エジプトにいた

・ア双方と同盟を結んでいた。しかし、英・ア戦争が発生するや、英支持・アルゼンチンの侵略非難を打ちだしたのである。

このように帝国主義の同盟とは、帝国主義の利害に基づいてどうにでも左右される、一時的なものでしかないということを明らかにした。米帝にどつて、アルゼンチンの行動は暴露したことである。米帝は周知のように英・ア双方と同盟を結んでいた。しかし、英・ア戦争が発生するや、英支持・アルゼンチンの侵略非難を打ちだしたのである。

第三は、國連の役割に対する小ブル平和主義の幻想が打ち碎かれたことである。國連は帝國主義世界体制の秩序を維持する機関だと明らかにしたのである。

第三は、國連の役割に対する小ブル平和主義の幻想が打ち碎かれたことである。國連は帝國主義世界体制の秩序を維持する機関だということが完全に証明された。

國連の決議によつてイスラエルは侵略を止めたであろうか、英・ア両国は「話し合いによるマルビナス諸島の領有権問題の解決という国連決議に忠実であつただろうか、否である。

市場の争奪と他国の強奪、国内の労働者の革命運動を阻止しようとした民族排外主義を強め、あらゆる国の労働者を愚弄し、分裂させ、粉碎し、ブルジョアジーのためにある國の賃金奴隸を他の國の賃金奴隸にけしかけようとする」ということである。日本経済摩擦、通貨問題、対ソ経済制裁問題等、いずれも帝国主義間の経済力、軍事力によって決定されんとされている。サミット閉幕後にミッテラン仏大統領は、「調整機能の喪失」と、その役割の終えんを認めざるをえなかつた。これは帝国主義の諸矛盾の尖鋭化をミッテランが認めたことに他ならない。

われわれは以上見てきた戦争のなかから今日の時代、帝国主義の時代の特徴のいくつかの政治的特質をあとづけることができる。  
それは第一に、「力がなにごとも決定する」ということである。日米経済摩擦、通貨問題、対ソ経済制裁問題等、いずれも帝国主義間の経済力、軍事力によって決定されんとされている。サミット閉幕後にミッテラン仏大統領は、「調整機能の喪失」と、その役割の終えんを認めざるをえなかつた。これは帝国主義の諸矛盾の尖鋭化をミッテランが認めたことに他ならない。

## 小ブル平和主義的反戦闘争を

われわれは以上見てきた戦争のなかから今日の時代、帝国主義の時代の特徴のいくつかの政治的特質をあとづけることができる。  
それは第一に、「力がなにごとも決定する」ということである。日米経済摩擦、通貨問題、対ソ経済制裁問題等、いずれも帝国主義間の経済力、軍事力によって決定されんとされている。サミット閉幕後にミッテラン仏大統領は、「調整機能の喪失」と、その役割の終えんを認めざるをえなかつた。これは帝国主義の諸矛盾の尖鋭化をミッテランが認めたことに他ならない。

## マルクス・レーニン主義通信

# ロッキード有罪判決と 強まるブルジョア議会主義

六月八日、東京地裁はロッキード事件全日空ルートで受託収賄罪に問われた元運輸相・橋本登美三郎に懲役二年六月、執行猶予三年、追徴金五百万円、元運輸政務次官・佐藤孝行に同二年、同三年、同二百万円の有罪判決を下した。

判決は、両被告が受けとった「三〇ユニット」について「請託」に見合う「わいろ」であるとの認識を持っていたかどうか、又、永田町かいわいで日常的に行われている「陳情」にすぎないという「わいろ性の認識」の否定に対し、「わいろ性の認識」を認め、更に、検察側の主張に基づき二階堂進、佐々木秀世、加藤六月、田中角栄らへの金の流れを認定したのである。

有罪判決に対して野党各党は最大の賛美をおくっている。だが、ロッキード事件は、元丸紅専務大久保、同秘書課長副島、同専務伊藤らの証言、コーチャンラ米国側関係者の発言、証言によって、すでに誰にも明らかな犯罪だったので、有罪判決は当然であった。

昨年一月の小佐野判決、今年一月の全日空側への有罪判決等、そして今回の有罪判決は、野党の全面賛美のなかで裁判所が「超階級」的性格を持っているかの幻想性を与えていた。

考えてみよ、ロッキード事件の発覚後の金権腐敗政治に対する労働者の闘いはいかに終束したか。労働者の闘いは、社共、総評の日和見主義者によって、国会喰間に制限され、政治家個人の「倫理性」、自民党政権の「金権的体質」を問題にすることによって、「クリーン」三木に足元をすくわれたではなかつたか。ブルジョア独裁支配は、田中らを犠牲にすることで何等打撃を受けることもなく、そしていまでは、裁判所の「超階級性」の幻想でブルジョア議会制、ブルジョア民主主義への信奉者をうみだしている。

金権政治に対する闘いはなぜ後退したのか。このことを不問にしたままでの、有罪判決に一喜一憂する社共の「闘い」は、敗北の途へ、労働者の闘いを階級協調の途へむけるものに他ならないであろう。

## 金権政治の不可避性

取扱、買取等は金額の多少にはかかわらず今日の社会では日々発生している。これは、

社共が指摘する「自民党政治の汚職、腐敗事件」という「政治的道義的責任」の欠如を正すことで解決される問題ではない。  
資本主義の下では権力犯罪、企業犯罪は不可避であり、腐敗した帝国主義の下では、それはより普遍的な現象となっているのである。

「資本主義はどのようにして民主主義と両立するか? 資本の全能を間接に実現することによってである! このための経済的手段は

二つある。(一)直接の買収、(二)政府と取引所との同盟。(われわれのテーゼでは、)このことは、つぎの言葉で表現されている。

—金融資本は、ブルジョア体制のもとでは『任意の政府や官吏を自由に買収する』と)。

商品生産、ブルジョアジー、貨幣の権力が支配しているかぎり、買収(直接の、または取引所を通じての)は、どんな統治形態のものでも、どんな民主主義のもとでも、『実現』される)(『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』)。

帝国主義が寄生的な、又、腐敗しつつある資本主義であるということが、収賄、買収、各種の獄獄、そして帝国主義の政治的特性である全線にわたる政治的反動を不可避なものとしているのである。

かつてドイツの経済学者エシュベーゲは、『金権政治と官吏』(一九一一年)のなかで官吏の銀行、鉄鋼シンジケート等とのゆゑ、天下りの頻発に関して、「もっとも広範な政治的自由でさえ、われわれが非自由人の国民となることからわれわれをすくうことはできない」と、金権政治の支配の下での政治的自由の無力を告発せざるをえなかつた。

だが今日の日和見主義者・社共は、ロッキード事件で明らかなるように、金権政治を独占資本の経済における支配と切りはなし、ブルジョア改良主義の途をはききよめているのである。彼らは「金権政治を一掃し、わが国の政治、経済を国民本位のものにするため」へをふりかさして闘うのである。これこそ帝国主義の諸矛盾、独占資本の支配をあいまいにし、その卑俗なブルジョア改良主義へ労働者を引きこむものに他ならない。

又、国会における証人喚問は、「人権保護か知る権利か」をめぐって争われ、ブルジョア民主主義の枠内闘いに終始している。この闘いでは野党の間にはどのような相違も存在しない。まさにあの自民党、独占資本の尖兵・民社党も、社共もブルジョア議会主義を引きこむものに他ならない。

## 腐敗強める 帝国主義を打倒せよ

有罪判決によって自民党内反動派は決定的打撃を受け、自民党内抗争が激化するであろうという一部の諸君の主張は、社共におとらず皮相な見解であろう。

労働者は、有罪判決に対してどのような期待も、更に、裁判所に対する幻想をも持つことはできない。なぜなら労働争議や、狹山差別裁判等を通して、裁判所の階級的性格はもはや誰にも明白になっており、又、ブルジョア民主主義がブルジョアジーに対しても支配、搾取の自由を保障しているのに、労働者がブルジョア支配の秩序をいくらかでも破ろうもないなら資本、警察、裁判所による弾圧が日常的に行使されているからである。

ロッキード事件は、独占資本の支配の維持のため田中らを犠牲にしたこと、そしてそれが金権政治批判の高揚によってもたらされたことも事実である。だが、労働者の闘いは不十分であった。金権政治を不可避とする独占資本の支配そのものに対する闘いへと発展させることができなかつた。その結果は、その後の政治反動、軍事大国化攻撃、そして「灰色高官」のいなおりさえも許してきたのである。

労働運動が社会主義から切りはなされ、日和見主義、社会排外主義に支配されていったことが、支配の危機を反動的に回避させてきたのである。社共の日和見主義は、マルクス主義からその革命的な精神を抜きとり、階級協調主義を強め、労働者の分裂を促進させていた。

「日和見主義ときっぱり手をきり、日和見主義がかならず失敗することを大衆に説明しなければ、現在、社会主義の任務を遂行することはできないし、労働者のほんとうの国際的団結を実現することもできない」(『社会主義と戦争』)。

寄生性、腐敗を強める帝国主義を、独占資本の支配を打倒すること、これが労働者の進むべき途に他ならない。

物神化する点では一致しているのだ。

こうしたブルジョア議会主義、ブルジョア民主主義を前提とした闘いが、かつて金権政治に対する闘争の後退をもたらしたのである。

## マルクス・レーニン主義通信

# 「教育の荒廃」と 日教組運動の頽廃

深まる経済的、政治的危機と、進む軍事大國化のなかで、資本家階級は露骨な教育の反動化を推進している。

その具体的現れの第一は、教科書の「検閲」、教科書広域採択などに顕著な、教育の國家統制である。六月二五日に検定を終えた来春からの中教審が打ち出した教科書広域採択とは、これまでの郡や市を基本単位とした小中学校の採択区域を教育事務所単位に広域化し、都道府県教育委員会選定の教科書のみを採択するというものである。教育委の教育長が文部大臣の承認制になっていることを考えれば、それが戦前と同じ国定教科書制に進むものであることは明らかであろう。

第二は、「教育の荒廃」の責任を戦後教育一教育労働者に転嫁するキャンペーンの下で、右翼による教育労働運動破壊・襲撃が激化していることである。日教組会館への右翼襲撃と発砲、大会会場であった島原での右翼一自治体一体となつた日教組しめだし等々の攻撃は、教育の軍国主義化にとって教育労働者の闘いの圧殺が不可欠であることを明らかにしている。

かつて、「経済復興」「高度成長」の時代は、「一億総パワー」が謳われ、それに「民主教育」(いわば自由競争的教育)が照応し、それが資本主義の腐朽性・頽廃の深まりに伴って、それに照応する合理的な教育政策へと転換し、今日、露骨な差別・選別教育が遂行されているのである。それを、基底部で支えるものが「五四養護学校義務化」であった。

臨調第一部会報告は、「大学、短大の規模抑制」「高等教育の多様化」「特色ある大學づくり」などを口にし、受験競争の激化と「高(中)低級」労働者の分断育成を主張しており、第二部会報告は、「産官(軍)学協同」を謳っている。それが、従順なエリートと低賃金労働者、産業予備軍を強いられる庞大な「おちこぼし」をつくりだし、軍事大国化にみあつた「国防教育」として統合せんとする途であることは明らかである。そして、六〇年代後半に爆発した全国学園闘争は、帝國主義的教育に対して、端的にあれその矛盾を暴露したのであった。

「教育の荒廃」は、資本主義の頽廃の反映に他ならない。一部の者だけが富み、金権政治にあくれば、腐敗し、他方、多くの労働者が労働強化、賃下げ、失業に呻吟し、しかも労働者相互の競争が激化するという事態が、明治に對して、どうして「反発がおきないわけがあろうか」「非行」には社会的根拠がある。彼らは、疎外されていることを感じてはいるが、何に疎外されているかを知りえない。あたかもラダイト運動が機械を労働者の敵と思つたごとく、彼らにあっては、学校(制度)が、そしてその「付隨物」たる教師が敵と映るるのである。又、今日の教育制度によつてつくりだされる「おちこぼし」は、差別分断支配にとつて不可欠のものである。資本にとつての過剰人口・産業予備軍は、不況期にその絶大なる威力を發揮する。まさに「鎮め」に他ならない。そして、資本家階級は、能力に応じて「国のために」に奉仕するというイデオロギー一本によつて統合せんとしている(もちろんそれに抵抗するものは圧殺される)。その統合軸として天皇がもちだされるのである。

だが、社会的生産力が発展するにともなつて相対的過剰人口が生みだされるということ、これこそ資本制の生産の矛盾と過渡性を明示しているではないか。そして、その外被が暴力(装置)と非合理主義イデオロギーによつてしか守りえないというところに資本家階級の危機が示されているではないか。

## 第五七回日教組大会

六月二八日から四日間の日教組第五七回定期大会は、以上のような情勢下で開かれた。だがそれは、商業新聞が言うように、「八三一年政治決戦」をひかえ、「亀裂回避の意識先行」(七月二日付『朝日』)たるものでしかなかったのである。

教育問題について、運動方針は「教育実態総合調査」に重点をおいている。主流派(社会党系)、反主流派(日共系)とともに、「民主教育」という点では一致している。彼らは、教育の国家統制の強まりに対しても、教科書の「左派」を対置するだけである。「政府と教会のどちらも、学校に対していかなる影響をも与ぼしえないようにしなければならない」(『ゴータ綱領批判』)。マルクスは、そこで「平等な国民教育」とか「学問の自由」というスローガンをも批判している)ということを断乎と染している」(同前)のである。

だが、先にも述べたように「民主教育」とは、日本資本主義の発展に必要なものだったのであり、資本主義の頽廃にともなつて、他ならぬ「民主教育」から「教育の荒廃」が生みだされたのである。このことを理解せずして「民主教育」を叫ぶことは、「古き良き資本主義」をなつかしみ、満足せる賃金奴隸をつくりだすこと以外を意味しない。同時に、「教育の荒廃」の責任が教育労働者にあつたのである。それは、臨調路線と対立するものではなく、ブルジョア教育を補完するものである。

教育論議のなかで、主流・反主流の対立を形成したのが「平和教育」の問題であった。「子ども・青年に対する「平和・軍縮教育」を組織的に推進します」(運動方針)という主流派の提起に對して、反主流派は「平和・民主主義を守るたたかいは本来おとの責任であること、学校教育は子どもの発達段階に即して基礎学力、体力、情操、市民道徳をはぐくむことになり、そうしたなかで平和・人権の尊さを教えることである」(七月二日付『赤旗』)と批判したのである。

この反主流派の主張はまったく反動的である。マルクスは、教育を「知育、体育、工業技術的養成」とし、その生産的労働との結合の重要性を強調している(もちろん社会主義を準備するものとしてである)。だが反主流派は、「情操」「市民道徳」を説くのである。「市民道徳」とは何か? それは、市民社会(ブルジョア社会)の秩序安定のために「守るべき」ものに他ならない。そこから生まれるものは、帝国主義的「平和」であり、ブルジョア的「人権」でしかない。一体、今日の社会の政治的諸関係が子供に反映しないということがあつらうか。自らを「おとな」と称して子供を管理・抑圧・愚民化し、従順な奴隸をつけりだすこと、これが反主流派の口にしていることであり、教師「聖職」論の行き着く先である。彼らの言うことが、教科書の「左偏」を言いたて、それによって子供の意識がゆがめられているという資本家階級の批難とどれほど違うといふのであらうか。

他方、主流派の言う「平和教育」も欺瞞的かつ矮小な政治教育にすぎない。主任制や「五四義務化」と真剣に鬪わず、自民党・「中道」となれど、まじめに反戦闘争を担わない「おとな」の言うことを子供が納得するなどありえない。かつてマルクスが述べたように、教育者が教育されねばならないのと「8頁につづく」

マルクス・レーニン主義通信

## 進行する「産報化」

労働者の一層の隸属を狙う行革攻撃は、今月二八日の基本答申に向け、一段と強まって いる。しかも、同盟・JCの主導する労働運動の「産報化」という情勢下で資本家階級の 攻撃はかけられてきているのである。それに対して、「平和と民主主義」の時代を回顧し、 総評の「再生」を対置するのは、歴史の歯車を逆にまわすものである。社会主義的労働運 動を構築すること、これ以外に資本家階級の攻撃と対決する途はない。

## 行革、「労戦統一」の攻撃

第二臨時行政調査会の狙う行革とは、国家主義を前面に出し、翼賛運動を謳い、「総合安保」構想を遂行するものである。

そもそも、鈴木首相が「政治生命をかける」

独占資本主義の破産の資本家階級の側からする表現であった。独占資本は、国家財政——ソフツに寄生することによって自らを維持してきたのであったが、深刻化する不況によつて腐朽性を露呈し、国家財政の危機を招来せざるをえなかつた。その「反省」から行革が叫ばれたのである。

たが、資本主義が資本主義となり、国家がブルジョア国家であるかぎり、独占資本のた

ては財政危機は克服されないのである（福祉費にしても、ブルジョア独裁維持に必要な懷柔のため全面的に削減されることはないであろう）。レーガンやサッチャーの政策が看板爆発とその深刻さを明らかにしているのであり、かくして資本家階級は、増税とインフレ政策のあいだで揺れ動かざるをえないのである。それは、戦前の高橋財政を想起させるものもある。すなわち、世界恐慌下での財政膨張を反省し、引きしめに転換した直後に高橋是清は暗殺され（二・二六事件）、以降、財政はとめどなく膨張し、戦時経済へとばく進したのであった。そして今、臨調部会報告は、この途を明示しているのである。

行革はさしあたって公務労働者に犠牲を強いるものである。独占的地位によつて搾取と收奪をおし進めてきた国鉄の赤字は、腐朽性によりその独占的地位を喪失したということであり、国家独占資本主義の頽廃の表われのひとつである。それに対し資本階級は「三五万人体制」どころか「二九万人体制」を口にし始め、又、「分割・民営化」として

さて、行革が「安あがりの政府」の実現であるかのような、おくれた民間労働者の幻想にのつかって、「完全実施」を叫んでいるのが民社＝同盟である。しかも、日米安保維持

本主義」の「終りの始まり」を告げるものである。

すなわち、生みだされた巨大な社会的生産力をブルジョア国家が掌握しきれなくなつたということ、これである。株式会社、国有企業は、資本制的生産の内部でのその否定に他ならない。それは、資本家階級がすでに「よけいな社会階級」となつたことを示している。レーニンが述べたように、独立からの前進は社会主義以外にはない。国鉄危機－財政危機は、「死滅しつつある資

は、臨調の「民営化」に単純に同調しえないのであり、だからこそ（国鉄）労働者に犠牲が集中・転嫁されるのである。・

国鉄では、例えば赤字必至のローカル線の建設などを見れば明らかである（日共のローカル線擁護の要求がどれほどピンボケであるか明らかであらう）。それ故、日共は党

和等、』、『他方、國家財政に被用財附  
級宥和のために増大せざるをえず、健保制度、食管制度等、国有企业も同様の役割  
をはたすものである（それは、国家への小  
ブル的幻想と相互補完的なものであり、そ  
の刀根の上に二本柱が立ちらん。されば、

へ註▽国鉄危機について簡単に述べておこう。株式会社や国有企業は、生産の集積・社会化の現象であり、もはや個々の資本家には経営できない巨大企業を意味するものである。そして、「近代国家が生産力を自分の所有に移せば移すほど、それはますます現実の総資本家になるのであり、ますます国民を搾取するのである」（『空想より

攻撃と対決する途はありえない。  
スクラップ・アンド・ビルド政策によつて労  
働者に犠牲を転嫁せんとしているのである。  
他方、電々の民営化も、INS（高度情報通  
信システム）の実現によつて、独占資本の利  
潤を確保せんとするものであり、合理化を不  
可避としている。そして、これらの攻撃が官  
公労働運動の解体をも狙うものであることは  
言うまでもない。

「防衛力の整備」（一月、同盟大会）を謳いつつである。彼らは、国際的にも国内的にも労働運動を分裂させ、資本家階級に売り渡すことを使命としているのである。そして、彼

は今や公然とブルジョアジーの社会的支柱であることを宣言している。だからこそ、彼らとの闘いぬきにして帝国主義との闘いも社会主義も問題となりえず、又、帝国主義ブルジョアジーの打倒をぬきにした彼らとの闘い（左翼的な政策の対置や左翼組合の結集など）は決定的に不十分なのである。だが、増税にしろインフレにしろ、更には軍国主義の強まりにしろ、すべての労働者の抑圧を強めるものであることは自明であろう。官民とわざすべての労働者は、「国民」的立場ではなく、賃金奴隸制廃絶の目標の下に団結しなければならない。

他方、総評民同も又資本家階級の攻撃に屈服している。全電通指導部は、「統制処分」の恫喝をも用いて「新会社構想」の署名運動を展開している。それが臨調と歩調をあわせ民営化に道を開くものであることは明らかである。又、民同に追随する動労革マル派は、「働く運動」をもって当局に屈服し、合理化に手を貸している。全通指導部は、「三〇年総括」を口にして反マル生闘争を否定し、全郵政との合同「『産報化』を目指している更に総評は、労戦統一に対しても、「統一準備会」へのなだれ込みや、年内発足を狙う「全日本民間労働組合協議会」（全民労協）への「一定の評価ができる」（七・一総評労戦統一対策委）なる賛美をもって追従し、「八二年度運動方針案」では、「社会党を支持し強める会」（中立労連、新産別とともにつくる）の運動にすべてを流しこみ、翼賛体制確立に合流せんとしているのである。

日本共産党はどうか。彼らは「ニセ行革」反対を唱え、「国民本位の行革」を叫んでいる。彼らは言う、「①国家権力機構と階級支配を維持するための財政……②の国家の経済への介入機能をもつ財政……③国民所得の再分配、福祉のための財政」が「今日の発達した資本主義国の国家財政構造」の「三つの構成部分」であり、①の対米従属、②の独占本位を改め、③をふやすことが必要である、と。これこそレーニンが批判した「新しいブルー

マルクス・レーニン主義通信

こう詠んだ。今、六月一八日の「連合赤軍事件」判決に対し、同じように反共的、反革命的キャンペーンが展開されている。だが、「あらゆる歴史上の闘争は、例え政治上であれ、宗教上であれ、あるいはその他のイデオロギー上であれ、いずれの領域でおころうとも、実際は社会諸階級の闘争の多少とはつきりした現われにすぎない」（エンゲルス『ルイ・ボナパルトのブルュメール十八日』）への序文）。

赤軍の教訓をブルジョア独裁打倒の闘いの糧とすること、これがすべての共産主義者と先進的労働者の任務である。

卷之三

六・一八中野判決は、徹頭徹尾ブルジョアの利害に貫かれ、革命運動への憎悪に満ち満ちた反動的なものである。すなわち、ブルジョア的＝偽善的「人道主義」の観点から「連合赤軍事件」を把えて未成熟な労働者人民の意識に訴え、極刑をもって「新左翼」運動への見せしめとし、反「過激派」の大合唱による労働者人民の分断と革命的左翼の孤立化－抹殺を狙うものに他ならない。

ある」という観点から、裁くならば内乱罪に  
るべきであると主張してきた。それに対し  
て六・一八判決は、「山岳ベースにおける総  
括を、組織の防衛とか、路線の誤りなど、革  
命運動自体に由来する」と考へるのは、事  
柄の本質を見誤ったと言うほかはなく、あく  
まで、被告人永田の個人的資質の欠陥と、森  
の器量不足に大きく起因し、かつこの合体し  
た両負因の相乗作用によつて、さらに問題が  
著しく発展、増幅されたとみるのが正当であ  
る」と述べている。

ますそこでは欺瞞的であたかも革命運動一般を否定するものではないかに語られてゐる。だがそれは、合法的な、体制的な「革命運動」は認めるということであり、それが更に重要なことは、「連合赤軍事件」をすべて個人の責任に転嫁していることである。井上正治弁護士は、正当にも「判決は、人の心を裁く」という誤りを犯すことになり、これ

## 判決に唱和する日本共産党

連合赤軍の結成は、おりしもベトナム戦争が終局に向いつつあった時期であった。そのベトナム戦争において、米帝に基地を貸し、ソンミ村をはじめとするベトナム人民の虐殺に手を貸してきたのは一体だれであったか。あくなき搾取のために、日常的に労働者を虐待し、殺りくしているのは一体だれなのか。全（チヨン）政権による光州虐殺に積極的に加担し、他民族への抑圧を強めているのは一体だれなのか。内外にわたる軍国主義を強めかつてと同じ帝国主義戦争によって一大殺りくを遂行せんとしているのは一体だれなのか。労働者人民は、必ずこれらの犯罪に正当な判決を下すであろう。

にあって、疾風迅雷のように翔（か）けめぐり、瓦壊（がかい）、消滅していった一革命集団によるすさまじい掠奪（りやくだつ）、殺戮（さつりく）、破壊の爪跡（つめあと）であって、その傷痕は十年を経たいまなお深く癒（いや）されることがない。犯行はその規模、回数については言うに及ばず、手段、態様の凶悪、殘虐性については比類がなく、発生した損害の甚大性も特筆されなければな

田は、自己顯示欲が旺盛で、感情的、攻撃的な性格とともに強い猜疑（さいぎ）心、嫉妬（しっと）心を有し、これに女性特有の執拗（しつよう）さ、底意地の悪さ、冷酷な加虐趣味が加わり、その資質に幾多の問題を蔵していた」と。これは、徹底した女性差別をも動員した保安処分イデオロギーである。判決は、「あさま山荘事件」を「逃げ場を失ったあげくの居直り強盗」と呼び、「最後はおめおめと全員逮捕されるという卑劣な反社会的犯行だった」と述べているが、この「過激派＝反社会的分子死すべし」というのがブルジョアジーの本音なのである。

彼らは骨の髄まで腐りきっている。レーニンは、「この（「労働貴族の層のブルジョアジーの側への経済的寝がえりが成熟し完成したという」）経済的基礎の上に、最新の資本主義の政治的諸機関……が、恭謙な、温順な改良主義的、愛国主義的な事務員や労働者に与えられる経済的特権や施し物に対応した、

い。  
革命派憎し」の感情だけである。そして、革命派を「もつととりしまれ」「極刑にしろ」と叫ぶのである。彼らが新左翼に一貫した態度をとってきたということは、ただ彼らがゆるぎなき反革命であったことの証左でしかな

の合唱の尖兵となつてゐるのが日本共産党である。彼らは言う、「冷血、残虐……」。セ『左翼』暴力集団の末路を、さまざまさせつけた『連合赤軍』事件。東京地裁は極型の断を下しました。ではだれが彼らを冰が凍らし、その根絶のためにたたかってきたのか。『泳がせ』政策の自民党政府、警察当局、廿やかせてきた一部政党・文化人たちはその責任を、どうとるのか――」（六月十九日付『赤旗』）、と。これほどの判決の賛美が他にあろうか。そして彼らは、それでもたりないというのだ。曰く、「今回の判決は、『京浜安保共闘』や『連合赤軍』を『左翼陣営』にいたとか、『革命集団』だとかいっていますが、彼らの正体は『左翼』や『革命』とおとそ無縁です」、「だいたい、日本の眞の革新政党である日本共産党への攻撃を目的にするような『左翼』や『革命』などありません。それは、ふつうニセ『左翼』、反革命集団というのです」、「さらに判決が、『京浜安保共闘』や『連合赤軍』の動機、目的が『共産主義社会の実現』にあったかのようにいってるのは、事実誤認もはなはだしいものです」。等々。彼らは又、細川隆元と太田薰の対談「細川 この問題について共産党はうまい。今までずっと（暴力集団を）批判してきた。社会党はもたもたしている。』太田 わたしはすでに東大闘争のとき、彼らにたいする態度をはつきりさせておかねば将来たいへんなことになると予言した……。』細川 その点、共産党はきびしい。点数をあげている」（こに太田の本質が現われてゐるのだが）をもちだして、細川にほめられたことを誇っている。だが、「名うての反共評論家・細川」にほめられる連中とは一体何ものであろうか。彼らには、論理も何もない。あるのはただ「

## マルクス・レーニン主義通信

政治的特権や施し物をつくりだしている」(『帝国主義と社会主義の分裂』)、と述べて外主義者、社会帝国主義者なのである。そこで日本共産党は、この「施し物」に慣れ親しんでしまい、司法権力は超階級的なものであるかに見えるのである。彼らについては、「合法性」が最高の基準なのだ。そして、このような連中こそ、まさしく社会排外主義者、社会帝国主義者なのである。

史的観念論に依拠する日本共産党にあっては、六・一八判決が個人の思想を裁いていることなどは認すべきことなのである。それは当然にも、「永田にも人間の心らしい一片のものも見当たらぬ」というように保安处分イデオロギーを煽ることになるのである。

例えば彼らは、「社会主義国」ソ連の「帝国主義的行動」というように、ソ連国家資本主義、社会帝国主義の経済と政治を切り離し、指導部の政策に切り縮めることや、今日の日本危機を自民党の「悪政」に還元するのと同じように、党史をも単に個人の考え方の歴史にすりかえている。

六月二一日付『赤旗』は、「新左翼」が「日本共産党の武装路線転換に反発して生まれた」という『朝日』の解説に異議を唱え、「日本共産党は党として『武装闘争路線』をとったことはありません。五〇年の不幸な党分裂の時期に一部が極左冒險主義の誤りをおかしたことはあります、それは党の正規の会議で認められた方針ではありません。しかも党はたとえ分裂した一部がおかした誤りであっても、六〇年よりはるか昔に党としてきっぱりただしています。したがって、日本共産党には『武装闘争路線』とか、その『転換』などということは歴史的事実として存在しない」と述べている。

四全協、五全協は「正規の会議」ではないと言うのか。ならば六全協といふ呼称は矛盾である。しかも、五全協の前に、分派闘争に対するコモンフォルム「判決」によって、宮本ら反対派は分派を解消し、合流しているのである。更に、六全協を前後する「点検運動」である。肃清をどのように総括しているのか。『東大学生新聞』(五六六年十月十日)に載った「日本共産党よ死者の数を調査せよ……」といふ詩をどのように考へているのか。

スターリニストによる歴史の偽造は周知のことである。日本共産党によれば、都合の悪いことはすべて「一部の誤り」になってしまふのである。「五一一年綱領」を「綱領問題文獻集」から抹殺するような連中を一体何と言えばいいのであろうか。日本共産党の六〇年は、まさにうそと虚構の、日和見主義の六〇年に他ならない。

諸君らは、「連合赤軍事件」の「責任」を問うとうのが。よろしい。「それ(バルチザン行動)をよびおこしているのは、強力な経済的および政治的原因である」(『バルチザン戦争』)。その責任は、「経済的および

政治的特権や施し物をつくりだしている」(『帝国主義と社会主義の分裂』)、と述べて外主義者、社会帝国主義者なのである。そこで日本共産党は、この「施し物」に慣れ親しんでしまい、司法権力は超階級的なものであるかに見えるのである。彼らについては、「合法性」が最高の基準なのだ。そして、このよう連中こそ、まさしく社会排外主義者、社会帝国主義者なのである。

史的観念論に依拠する日本共産党にあっては、六・一八判決が個人の思想を裁いていることなどは認すべきことなのである。それは当然にも、「永田にも人間の心らしい一片のものも見当たらぬ」というように保安处分イデオロギーを煽ることになるのである。

例えは彼らは、「社会主義国」ソ連の「帝国主義的行動」というように、ソ連国家資本主義、社会帝国主義の経済と政治を切り離し、指導部の政策に切り縮めることや、今日の日本危機を自民党の「悪政」に還元するのと同じように、党史をも単に個人の考え方の歴史にすりかえている。

六月二一日付『赤旗』は、「新左翼」が「日本共産党の武装路線転換に反発して生まれた」という『朝日』の解説に異議を唱え、「日本共産党は党として『武装闘争路線』をとったことはありません。五〇年の不幸な党分裂の時期に一部が極左冒險主義の誤りをおかしたことはあります、それは党の正規の会議で認められた方針ではありません。しかも党はたとえ分裂した一部がおかした誤りであっても、六〇年よりはるか昔に党としてきっぱりただしています。したがって、日本共産党には『武装闘争路線』とか、その『転換』などということは歴史的事実として存在しない」と述べている。

四全協、五全協は「正規の会議」ではないと言っているのか。ならば六全協といふ呼称は矛盾である。しかも、五全協の前に、分派闘争に対するコモンフォルム「判決」によって、宮本ら反対派は分派を解消し、合流しているのである。更に、六全協を前後する「点検運動」である。肃清をどのように総括しているのか。『東大学生新聞』(五六六年十月十日)に載った「日本共産党よ死者の数を調査せよ……」といふ詩をどのように考へているのか。

スターリニストによる歴史の偽造は周知のことである。日本共産党によれば、都合の悪いことはすべて「一部の誤り」になってしまふのである。「五一一年綱領」を「綱領問題文獻集」から抹殺するような連中を一体何と言えばいいのであろうか。日本共産党の六〇年は、まさにうそと虚構の、日和見主義の六〇年に他ならない。

諸君らは、「連合赤軍事件」の「責任」を問うとうのが。よろしい。「それ(バルチザン行動)をよびおこしているのは、強力な経済的および政治的原因である」(『バルチザン戦争』)。その責任は、「経済的および

政治的原因」をつくりだしたブルジョアジーと、それに対する労働者人民の闘いをねじまげ、圧殺してきた日本共産党があるのである。そして、連合赤軍は疑いもなく敵階級と闘つたのである。階級的観点に立つ限りこれ以外の判断はありえない。だからこそ敵階級は連合赤軍への悪意に満ちた攻撃を強めているのであり、だとするならば、その方向と方法、綱領・戦術・組織こそが味方階級にとって問題なのである。

連合赤軍の一方をなした赤軍派は、第二次ブントー新左翼の小アル急進主義の極限とも言えるものであった(第二次ブントの総括は度も述べてきたのでくりかえさない——『通信』連載「第二次ブント総括」、『マルクス・レーニン主義研究』№1等参照)。赤軍派は、戦術の急進化によって権力を奪取するという「政治過程論」に典型的なブントに共通する戦術上の思想から、武装闘争をその最高形態と見え、それを階級闘争の発現形態として見るのでなく、逆に先駆的な「武装闘争」から階級闘争の発展段階を規定し、すべてをその下に体系化した(これは形を変えたスターリン戦略論である。何度も述べたように、スターリン戦略論と反スタの戦略主義は共通性を有しているのである)。そして、唯一、武装闘争を基準として日共革命左派と統合し、連合赤軍を結成したのである。

このことは同時に、政治的基準の喪失をもたらさずにはおかなかった。それは、塩見、上野、花園、八木などの百花齊放的な路線提起としても表現されている。だが、政治的基準の喪失は、抽象的な共産主義と武装闘争を基準とする規律に帰結したのであった。

レーニンは、バルチザン戦争への非難、弱點をとりあげ、「この闘争手段は他の諸手段に従属させられなければならない、主要な闘争手段に調和させられなければならない、社会主義の啓蒙的な、また組織化する影響によって醸化されなければならない」ということ、「蜂起の事業におけるわが党の弱さ」(『バルチザン戦争』)を克服すべきことを結論づけている。だが連合赤軍指導部は、革命戦争路線の弱点の克服を「共産主義化」——個人の思想点検に求めたのである。「敵との直接的な緊張関係を通してではなく、味方内部を規律によって共産主義化しうるという幻想は、思想点検に求めたのである。「敵との直接的な緊張関係を通してではなく、味方内部を規律によって共産主義化しうる」という幻想は、思想点検に求めたのである。清算主義者が口にする「潮流をこえて」などは論外である。そして、強大なプロレタリア政党こそ、バルチザン行動を「掌握すること」ができるであろう。

六・一八判決は、言うまでもなく革命運動、共産主義運動に対する攻撃である。それにに対する反撃は、連合赤軍を教訓化して確固たる革命党を建設し、「革命派せん滅」を唱うブルジョアジーと、それに唱和する社会排外主義者、社会帝国主義者との全面的闘争を組織するとのなかにだけあるのである。

### 連合赤軍の教訓とは何か

今日の時代は、階級闘争の時代、敵と味方の階級による非和解的な闘いの時代である。そして、連合赤軍は疑いもなく敵階級と闘つたのである。階級的観点に立つ限りこれ以外の判断はありえない。だからこそ敵階級は連合赤軍への悪意に満ちた攻撃を強めているのであり、だとするならば、その方向と方法、綱領・戦術・組織こそが味方階級にとって問題なのである。

連合赤軍の一方をなした赤軍派は、第二次ブントー新左翼の小アル急進主義の極限とも言えるものであった。だが、多くの連合赤軍総括は、思想一般を問題とすることにより、「共産主義化」の枠をこええなかつたし、清算主義—経済主義に陥らざるをえないということを示したのであった。そして、戦闘的に闘うことによる組織の解体(連合赤軍では同志虐殺という最も衝撃的な形で現われた)——これがわがブント総括の中心にすべきはならぬ問題である。

我々に即して言えばこうである。我々は、ス・レーニン主義研究』№1等参照)。赤軍派は、戦術の急進化によって権力を奪取するという「政治過程論」に典型的なブントに共通する戦術上の思想から、武装闘争をその最高形態と見え、それを階級闘争の発現形態として見るのでなく、逆に先駆的な「武装闘争」から階級闘争の発展段階を規定し、すべてをその下に体系化した(これは形を変えたスターリン戦略論である。何度も述べたように、スターリン戦略論と反スタの戦略主義は共通性を有しているのである)。そして、唯一、武装闘争を基準として日共革命左派と統合し、連合赤軍を結成したのである。

このことは同時に、政治的基準の喪失をもたらさずにはおかなかった。それは、塩見、上野、花園、八木などの百花齊放的な路線提起としても表現されている。だが、政治的基準の喪失は、抽象的な共産主義と武装闘争を基準とする規律に帰結したのであった。

レーニンは、バルチザン戦争への非難、弱點をとりあげ、「この闘争手段は他の諸手段に従属させられなければならない、主要な闘争手段に調和させられなければならない」ということ、「蜂起の事業におけるわが党の弱さ」(『バルチザン戦争』)を克服すべきことを結論づけている。だが連合赤軍指導部は、革命戦争路線の弱点の克服を「共産主義化」——個人の思想点検に求めたのである。清算主義者が口にする「潮流をこえて」などは論外である。そして、強大なプロレタリア政党こそ、バルチザン行動を「掌握すること」ができるであろう。

六・一八判決は、言うまでもなく革命運動、共産主義運動に対する攻撃である。それにに対する反撃は、連合赤軍を教訓化して確固たる革命党を建設し、「革命派せん滅」を唱うブルジョアジーと、それに唱和する社会排外主義者、社会帝国主義者との全面的闘争を組織するとのなかにだけあるのである。

## マルクス・レーニン主義通信

「245頁からつづく」

ドン主義」に他ならない。彼らは、国家の本質も、帝国主義一國家独占資本主義の本性も理解していない。すでにマルクスは、「ブルジョア国家は、自己の階級の個々の成員および被搾取階級に対する相互保険会社以外の何物でもない。それは被搾取階級の抑圧がますます困難になるので、ますます経費がかさみ、又ブルジョア社会に対して外見上ますます独立化せざるをえない保険会社である」(『社会主义と租税』)と述べているのである。

共産党は又、「不公正税制のは正」が大事であると言う。彼らは租税の本質を考えることではない。「租税の軽減、その平等配分等等、それは、月なみのブルジョア的改革である。租税の廃止、それは、ブルジョア的社会主義である。このブルジョア的社会主義は、特に、商工業中間階級と農民に訴える」(『同前』)のである。「国民」主義、これこそ彼らの小ブルの立場を鮮明にしている。それは、まぎれもなく国内平和・階級協調主義なのである。

### 総評の「再生」か止揚か

「たたかう総評の再生」を叫ぶ太田、市川、岩井三顧問は、日共一統一労組懇から新左翼の一部にまでもちあげられている。だが、彼らの言う「たたかう総評」とは何か。

春闘方式の確立時に、太田は、「太田の立場は利潤分配要求である」と日経連から賞讃され、太田・岩井執行部は、生産性向上運動を支持する「新賃金綱領」作成を第一の仕事として登場した。五六春闘で、岩井は「春闘を『生産性向上の要求』と考えている」と述べ、公労委の労働者代表清水慎三は、国鉄当局ととりひきし、賃上げ放棄を約束した。以降太田らは、「長期低姿勢論」をもって労働者の忍耐を強い、政治的高揚が煮つまつた五九年には「社会党を強くする会」を作つて労

働者人民の鬪いにタガをはめてきた。このよ

うな、労働者の隸属とひきかえにいくらかのそれが「出口のないどうどうめぐり」(エンゲルス『労働組合』)によって頗廃し、今日の総評の解体に結果している。彼らこそ、それが基礎をつくったのであった。賃金闘争を商売と同一視した太田はその典型であり、彼らを抑えるかにあり、物価を押し上げて四万円をとるより、物価を下げて三万円とる方が国民的支持を受ける」として、労働運動を完全に国民運動に解消してきたのである。

「自由主義者は……労働者に向って諸君に対する『社会』の同情があるとき諸君は強いのだといっているが、マルクス主義者は労働者に向って別なことを言う。諸君が強いとき諸君は『社会』の同情を得るのだ、と」(レーニン『経済的ストと政治的スト』)。

日共が太田らを美化するのは理由のないこことではない。彼らこそ昔から太田らをもちあげてきたのである。例えば、五七年『前衛』一二月号は、「日本の労働運動はじまって以来、岩井章くらい強大な政治的背景をもつている人はいないと思う。個人としての力量も、これくらいすばらしい人はいない……」などと述べているのだ。彼らも又、総評労働運動の頽廃、崩壊に少なからぬ責任がある。そして今、彼らは、一層ブルジョア自由主義的基本をもつて「新ナショナル・センター」を唱えているのである。

「総評の再生」「社会党を中心」(三顧問アピール)とする運動に未来はない。自称「左派」の連中が口にしていることは、個々の条件をつけて日和見主義者、社会排外主義者と手を結ぶということである。そして、彼らが組合主義者であり、組合運動が至上のものであると考へている限りは、これ以上にできることはありえない。そして、主観的にはどう

思おうとも、それはブルジョア的政治に帰結するのである。

そもそも、左派が伸長してきたから「左派」を結集するという考え方自体、彼らのいいかげんさを示し、これまでいかに右派となれあつてきただを自己暴露するものに他ならない。

肝心なことは、エンゲルスやレーニンが強調しているように、労働組合は停滞と恐慌の時期には無力であること(もちろん、経済闘争を組織することである。社会排外主義を偶然のものと見なし「左派」の結集を対置するのではなく、社会排外主義の経済的基礎を生みだす帝国主義に対する闘いを強め、プロレタリア政党を建設し、マルクス・レーニン主義の土台の上に労働運動を構築することである。

政治・社会体制そのものに対する革命的闘争を組織することである。社会排外主義を偶然のものと見なし「左派」の結集を対置するのではなく、社会排外主義の経済的基礎を生みだす帝国主義に対する闘いを強め、プロレタリア政党を建設し、マルクス・レーニン主義の土台の上に労働運動を構築することである。

「246頁からつづく」

日教組大会でのもう一つの争点は、「労戦統一」をめぐる問題であった。運動方針は、形骸化した「五項目補強見解」、「全的統一」を謳っており、横枝は「なかに入つて体質を奪、反動と戦争に反対して闘い、社会主義の展望を切り拓くこと、このことを基礎とすることにより若い戦士を育てることができるのである。

日教組大会でのもう一つの争点は、「労戦統一」をめぐる問題であった。運動方針は、形骸化した「五項目補強見解」、「全的統一」を謳っており、横枝は「なかに入つて体質を奪、反動と戦争に反対して闘い、社会主義の展望を切り拓くこと、このことを基礎とすることにより若い戦士を育てることができるのである。

日教組の解体は、総評の解体の一環として不可避である。そして、社会主義をめざす教育労働運動の創出こそが、それを止揚する途なのである。

「22頁からつづく」

する志向、ブルジョア的・帝国主義的利害を高めようとする志向、これが戦争の性格であり、この前には国連は全く無力であった(国連の場を通した革命的宣伝・煽動を否定するものではない)。

国連を通して世界を改良しようと考える小ブル平和主義者の無力性も又、明らかである。帝国主義の支配の下では平和はありえない。「平和」一般への願望ではなく、すべての国のブルジョアジー・支配層に対するすべての国の大衆を解放しえる唯一の途である。

## 二期工事阻止・廃港へ

### 7・4二里塚集会に一万人

閣議決定一六周年にあたる七・四三里塚集会は、「二期阻止・廃港」の決意も新たに、一万人の労働者人民が結集した。

今、政府・資本家階級は、パイプライン千葉ルートを貫通させ、新関西国際空港建設に血道をあげ、「二期着工」の攻撃にうつてでんとしている。そしてそれを受け、反対同盟の分断・懷柔・破壊策動を強めているのである。一方での「話し合い」攻撃、「成田用水」、公団用地貸し付け、他方での東山氏虐殺をめぐる付審判請求、成田治安立法取消請求の却下、このようなアメとムチの攻撃に対しても、反対同盟は断固として

して闘い抜くことを宣言している。七・四集会で北原事務局長が述べたように、まさに三里塚闘争は「実力闘争を軸に発展してきた」のであった。だからこそ資本家階級は、労働運動の「産業化」と軌を一にして三里塚闘争圧殺に執心せざるをえないのです。

全ての労働者諸君! 日和見主義・社会排外主義と手を切り、「二期阻止・廃港」の政策闘争、政治ストライキを組織せよ!

## 夏期一時金の圧倒的カンパを